

2019年度 はばたき学習（総合的な学習の時間）実践・研究計画

部 員 ○菅野 宣衛 福田 佳子 松橋 純子 高橋 裕和

研究テーマ

自ら見いだした課題を、よりよい解決方法を用いて探究し、対象の本質に迫る子どもを育む学び

1 研究テーマについて

総合的な学習の時間においては、探究的な「見方・考え方」を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することが求められている。探究的な学習に主体的・協働的に取り組む中で、自分なりの新たな知見や結論を見いだすとともに、自ら社会に関わり参画しようとする意志や、社会を創造する主体としての自覚を徐々に高めていくことが期待されている。

本校の「はばたき学習」は、物事の本質を探っていく一連の知的営みとしての「探究的な学習」の過程に、「対話」を通して学びをつなぐ活動をより効果的に位置付けることで、主体的・協働的に課題を探究しようとする子どもの育成に努めてきた。1年次の実践では、探究的な過程における協働的な活動のよさを実感しながら学ぶ子どもの姿に、一定の成果を見ることができた。しかし、子ども一人一人が適切な方法を自覚的に用いながら、課題解決に取り組むという点では課題が残った。こうした課題を踏まえ、2年次は研究テーマを見直すこととした。

はばたき学習部では、研究主題の「自律した学習者」を、「実生活や実社会の中から課題を見だし、よりよい解決に向けて主体的・協働的に学習に取り組む子ども」と捉えた。そして、研究副題「学びをつなぎ資質・能力を高める」を受け、はばたき学習における「学びをつなぎ、資質・能力を高めていく子どもの姿」を次のように捉えた。

- ① 「人・もの・こと」と関わりながら、予想や理想などと現実との「ずれ」に気づき、自ら課題を見いだしていく姿
- ② 探究的な学習の過程において、よりよい解決方法を考えたり、選択したりしながら主体的・協働的に課題の解決を目指していく姿
- ③ 対象や解決方法について学んだことを自分の言葉で意味付け、次なる学びに活かす姿

これらは、本校の目指す「自律した学習者」の姿そのものにほかならない。このような子どもの姿を目指し、はばたき学習部の研究テーマを「自ら見いだした課題を、よりよい解決方法を用いて探究し、対象の本質に迫る子どもを育む学び」と設定した。前段の「自ら見いだした課題を」とは、上記①の子どもの姿を、後段の「よりよい解決方法を用いて探究し、対象の本質に迫る」の部分は、②③の姿を想定したものである。

はばたき学習においては、子ども自ら課題を設定し、子ども自身が課題解決の目的や意義を明確に捉えていることが欠かせない。そのためには、身近な生活の中にある問題や地域に密着した事象など、学習対象となる「人・もの・こと」に対する、これまで抱いていた考えや理想と、直接関わり合う中で見いだした現実との「ずれ」を自覚できるよう工夫する必要がある。そして、対象との出会いから子どもが課題を見だし、解決方法や手順を考えていく過程で、自ら選択し、判断していく場面を保障することが重要である。

探究的な学習の過程においては、一つの正解には収束しない課題や、まだだれも解決まで至っていない未知なる課題などについても、自らの知識や技能、様々な学習で身に付けてきた「見方・考え方」等を総合的に働かせながら、粘り強く探究し続ける学びの

姿が望まれる。その際に大切になってくるのは、他者と協働して課題を解決しようとする態度である。共に学習する仲間だけでなく、他の学級あるいは学校全体、更には、地域の人々、専門家、文化的背景や立場・意見等の異なる人々をも含めて、多様な他者と双方向の交流を行い、フィードバックを得ることで、多様な情報を活用したり、異なる視点から考えたりする力を育てていく。

このような「人・もの・こと」と関わり合いながら探究的な学習を進める中で子どもは、自らの生活や行動を見つめ直したり、自分にとって対象がもつ意味や学ぶことの価値を考え直したりする場面に直面するであろう。これこそ、総合的な学習の時間特有の省察であり、それらは、現在及び将来の自己の生き方を考える契機となっていくに違いない。

実社会や実生活から自ら課題を見いだし、自ら選択した方法を用いて探究していく中で、物事の本質に迫ろうとする子どもの姿を目指して、今年度の実践・研究を進めていく。

2 研究の重点

(1) 探究的な学習過程の質を高める効果的な省察の手立ての工夫

「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」といった一連の探究的な学習過程を自覚的に進めることができるように、「なぜ追究するのか」「何を明らかにしようとしているのか」「どの方法が有効なのか」といった視点から目的・内容・方法を、じっくり見つめ直す省察の時間を子ども一人一人に十分に保障していく。省察の場面では、対象や他者との「対話」から得られたフィードバックをもとに、そこから得た気づきを自分の言葉で意味付け、更新していく活動を重視する。多様な視点や方法を用いて対象や学習過程について考えることにより、新たな気づきやよりよい解決方法を見いだすことができるものとする。

(2) 課題解決に用いる「見方・考え方」を選択し、自覚的に用いる力を高める単元構成の工夫

子ども自身が課題解決の際に用いる「見方・考え方」を選択し、省察を踏まえて、よりよい学習計画や方法を見いだしていく姿勢を重視していく。

そのためには、課題の見付け方やつくり方、目的に応じた情報の集め方や調べ方、整理・分析の仕方、まとめ方や表現の仕方、報告や発表・討論の仕方などを考える場面で、適切な選択肢を示したり、試しに使ってみたりする活動を位置付けることが重要となる。

各教科等の学習経験を想起しながら、比較する・分類する・関連付ける・類推するといった「見方・考え方」を友だちや教師と共に実際に使ってみる中で、課題や自分に合った方法を、子ども一人一人がじっくりと時間をかけて見いだすことができるように、単元を構成していく。

3 研究・研修計画

時 期	主な研究・研修行事	研究・研修内容
1 学期	・はばたき学習部会	・実践・研究計画，年間指導計画作成
2 学期	・はばたき学習部会	・実践・研究についての情報交換 ・授業を通しての重点事項の検証
3 学期	・はばたき学習部会 ・オープン研修会提案授業 (6年：菅野)	・授業を通しての研究の方向性の確認 ・実践記録・研究計画案の作成